

盛り場の起点と条件

——上野広小路界限の変遷から

神崎 宣武

- 一 駅を起点としたバームクーヘン構造
——現代の盛り場の位置づけ
- 二 水際・台地際の空き地と仮設興行
——江戸の盛り場の起源
- 三 茶屋の興亡と既得権
——幕末の盛り場の発達
- 四 盛り場の公用と拡大
——明治以降の軍需景気

一 駅を起点としたバームクーヘン構造

——現代の盛り場の位置づけ

上野駅（東京都台東区）の山下口から湯島天神下（文京区）にかけての一带（広小路界限）は、江戸・東京における典型的な盛り場を形成している。

その規模や華やかさでは、たとえば歌舞伎町（新宿区）や六本木

（港区）の界限に及ばないところがあるが、歌舞伎町や六本木は、いふならば戦後（昭和二十年以後）に急速に発達した新興の盛り場なのである。銀座（中央区）や赤坂（港区）も、その歴史は歌舞伎町や六本木より古いが、近・現代の盛り場であることにかわりない。

一方に、歴史の古い盛り場に浅草（台東区）がある。が、現在の浅草には往時の活気がない。両国（墨田区）も同様である。

その意味では、江戸以降現代まで、さほどの浮き沈みを感じさせない状態で盛り場の灯をともし続けているのは、上野広小路の界限だけ、ということができるのである。

ちなみに、盛り場とは、「飲食店、商店や娯楽施設が集中していて、人が多く集まる、にぎやかな場所。繁華街、歓楽街」〔『日本国語大辞典』〕ということになる。が、ここでとりあげる盛り場は、おもにその一方の「歓楽街」のことである。

さて、現在の上野広小路の界限の状況をあらためてみてみよう。

その場合の起点は、「駅」に求めるのが妥当ではなからうか。

あらためていうまでもなく、現在の一般的な盛り場は、駅の周辺に開けている。周知のように、夜ともなると、駅と盛り場を結ぶ道路は、一杯機嫌のサラリーマンたちが往き来する。住居と勤務地の中継地点が駅であるのと同様に、盛り場と住居の中継地点も駅である例が多い。

東京でたとえるなら、有楽町駅に至近なところに銀座があり、渋谷駅近くに道玄坂が、新宿駅近くに歌舞伎町が、池袋駅近くに西口通りが開けている。それらは、いずれも東京を代表するターミナルであり、東京を代表する盛り場である。しかし、それらにかぎったことではなく、また東京にかぎったことでもなく、JR線・私鉄ともに中小それぞれ駅の近くには盛り場が開けている。統計数値にあたってはいないが、あるいはあたるまでもなく、俗に飲み屋街といわれるところの盛り場の大半は、現在、駅の周辺に開けている、といっても過言ではあるまい。

そして、それらの盛り場は、駅が開設されたのち乗降客の増加とともに開けていったのである。とくに、昭和三十年代の高度成長期に都市が大きく拡大し、ターミナルを利用する通勤者が急増するにつれて、盛り場は、駅周辺に集中して開けていったものである。そのことは、われわれの記憶にまだ新しい。

最近の顕著な例は、六本木であろう。

六本木が盛り場として今日的に有名になったのは、昭和四十年代のことである。それは、地下鉄日比谷線の六本木駅が開設（昭和四十一年）されたことに起因する。

それまでの六本木は、最寄駅が渋谷駅であり、そこからバスカタクシーを利用してはならず（徒歩では少々遠い）、いかなれば不便な地にあった。したがって、麻布方面の高級住宅地を背景に洒落たレストランや喫茶店は存在したものの、盛り場を形成するまでには至らなかった。

もちろん、現代の盛り場を発展させるターミナル機能としては、発着路線が単数であるよりも複数である方がよい。そこで、かつて股脈をきわめていた浅草や両国が現在では地盤沈下が著しいのも、そこに不特定多数の客を集めるターミナル機能が脆弱なのが原因、とすることができるのである。

盛り場は、特定の客層を対象とてはいない。店それぞれに客層が定まることはあっても、盛り場全体としたら広く大衆を相手に成りたっているのである。だから、現代では駅に乗降するサラリーマン客層が、もつとも必要な成立要素となる。わざわざ自動車で乗りつけてくる客層は、もちろん上得意には違いないが、とくにそこで飲酒をともしなうことを考えてみると自己運転はありえず、現在の盛り場を成立させる主要因にはなりえないのだ。

さて、駅を中心点として、どのような位置に盛り場が開けているか——そこで、上野広小路の界限の構図である。

ここには、起点としての駅が五つある。ひとつは、JR山の手線の上野駅、またもうひとつは、御徒町駅。それに、地下鉄の上野広小路駅（銀座線）と湯島駅（千代田線）である。さらに、強いてもうひとつ

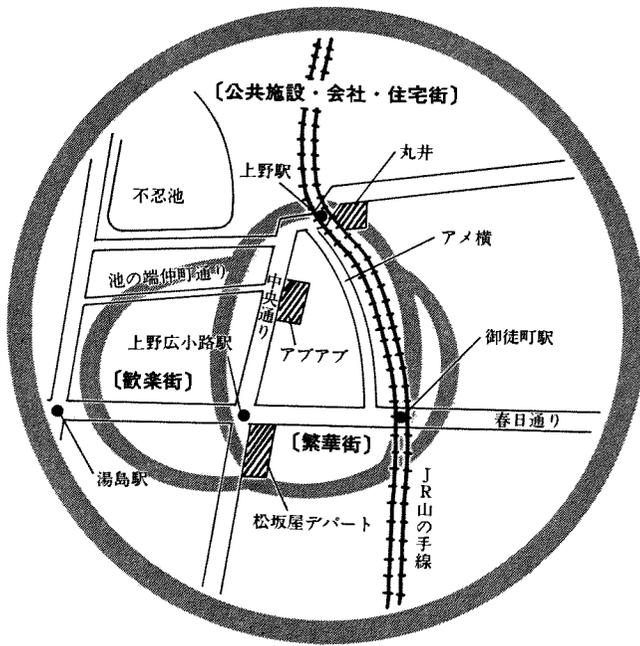


図1 上野広小路の界限略図

つあげると、地下鉄日比谷線の仲御徒町駅も至近の距離にある。しかし、そのなかで一日平均の乗降客が多いのは、上野駅、御徒町駅、上野広小路駅の順になる(ちなみに、上野駅におけるそれが約一〇〇万人、御徒町駅が約四〇万人、上野広小路駅が約八万人である)。とくに、盛り場への起点ということで夕方の出札客をみると、そのほぼ五分の一が見込めるのである(もちろん、すべてが盛り場の客とい

うわけではない)。

そこで、上野駅、御徒町駅、上野広小路駅の三点(ちょうど二等辺三角形の位置にある)を定め、その近隣の施設をみてみる。

まず、中心部で目だつのは、デパートである。丸井・アブアブ・松坂屋。次に、この区画のメインストリートとなる中央通りに面して、銀行が軒を並べている。そのあいだに、洋品店や靴店、食堂(すし屋・洋食堂・中華料理店など)などがある。さらに、中央通りの裏(JR山の手線との中間)には、通称アメ横と呼ばれる集合商店街がある。その主流商品は、洋品、装身具と食品である。

つまり、三つの駅をつなぐ中心部は、買いもの客でにぎわう繁華街ということになる。それは、中央通りを軸として開けている、とてもよい。

その外郭部に、歓楽街が開ける。それは、中央通りと交叉する春日通りを軸にしている、といってもよい。つまり、地図上ではほぼ楕円形にまとめることができる繁華街の両脇に歓楽街が突出してあるのである。歓楽街は、いうまでもなく居酒屋・バー・スナック、それに風俗営業が入りまじって構成されている。が、かつては、そこは三業地であった。三業地とは、料亭・待合・置屋の三業種が軒を連ねた花街のことである。

さらに、その外郭部、駅からするとともに遠いところに目をむけてみよう。そこでは、大規模な敷地をもつ公共施設がでてくる。学校・病院・会館、それに寺社や公園などである。そして、卸商店や工

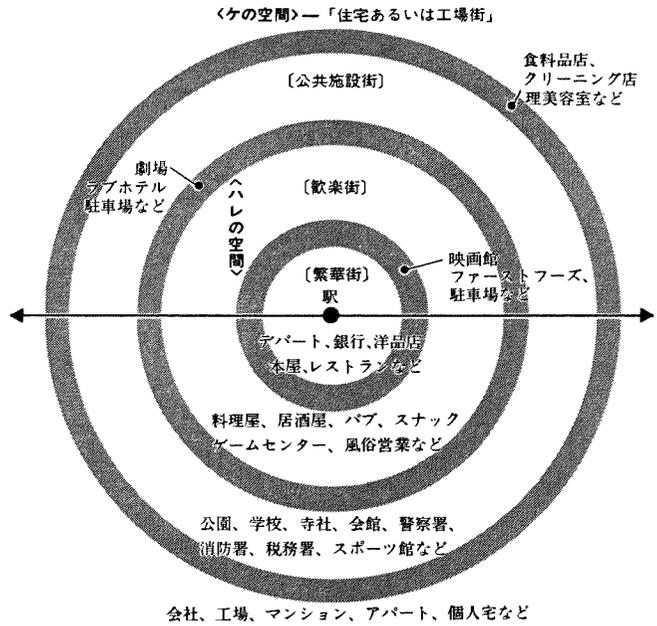


図2 ターミナルを基点とした街の構造

場、住宅などもでてくる。つまり、日常生活ゾーン、というか非盛り場ゾーンなのである。

これを、図式化すると、駅を起点とする三層の円心円構造が明らかになるだろう。バームクーヘン構造、とでもいえばよい。あるいは、蛇の目構造、といってもよい。

そのことは、ひとつ上野広小路の限界についてだけでなく、現代都市における盛り場のあり方の原型とということがいえそうである。必ずしも全円構造を前提とせず、半円構造や三分の一円構造もありうる、

とすれば汎用性はさらに高まる。筆者の調査結果(季刊『へるめす』13に所収の「盛り場は世界」で報告)では、東京では新宿駅や池袋駅を起点とした構造がもっとも典型的であり、渋谷駅や赤坂駅を起点とした場合は、ほぼ半円構造となるのである。

もっとも、このことは、私の独自の見解ではない。近年、マーケティングの分野で同様の視点が呈されている。たとえば、松沢光雄氏は『繁華街を歩く東京編』(総合ユニコム)で、都市は中心域(装身施設)、中間域(飲食・娯楽施設)、周辺域(休息施設)に分化する、といっている。また、博報堂生活総合研究所編『タウンウォッチング』(PHP研究所)では、駅を中心としたバームクーヘン型の構造を説いているのである。

しかし、上野広小路の盛り場は、すでに江戸期に開かれている。すると、近・現代の構造は、右のバームクーヘン構造を原型とするといえることができる。交通機関が未発達な時代におけるもうひとつの構造を描かなくてはならなくなるだろう。

江戸期における盛り場の立地は、いかなるものであったのだろうか――。

二 水際・台地際の空き地と仮設興行

――江戸の盛り場の起源

江戸時代における盛り場は、仮設の装置からはじまった。

とくに大がかりな仮設のイベントが行なわれるひとつの立地的条件とは、そこが空き地であるということではないだろうか。卑近な例でいうと、サーカスがいい例である。河原や埋立地などに小屋が掛けられ、そうしたところに人を集めてきた。

その空き地が都市においてどのような立地にあるか、まだ大阪、京都、その他の都市での事例を拾っていないため普遍的な問題としてここに掲げることができないが、少なくとも江戸・東京に限ってみれば、山際、水際というところに空き地がかなり分散してあった。

たとえば、のちに花街を連鎖的に形成する湯島天神下と神田明神下は、いずれも本郷台地の際（山際）にあるが、文化年間（一八〇四〜一八一八年）、あるいは嘉永年間（一八四八〜一八五四年）の切り絵図には、その間の台地斜面が「なだれ地」として空き地になっているのである。

これは、地盤不安定の傾斜地として物理的にも利用がむづかしかつたから空き地のまま残された、とも考えられる。が、そうした空き地の多くは、「火除地」と位置づけるのが妥当である。

火事は江戸の華、ともうたわれた。近世の大都市である江戸では、火事が頻繁におきて多くの町人が焼けだされた。それは、深刻な社会問題ともなっており、幕府は、ときどきに定火消や大名火消、町火消の組織強化をはかり、火除地の指定を増やしたりしている。

とくに、明暦三（一六五七）年正月の火事は、まる二日間も燃え続き、江戸城の一部を含め、江戸の町の大半を焼く大火であった。それ

がため、火災後三日間で江戸中の保有米がなくなり、大飢饉の体であった、という。

そこで、幕府は、たとえば白銀町（芝）へ高さ二尺四寸、東西十町余の土堤を築いたり、日本橋と京橋の間に三カ所の広小路（火除地）をつくったりしている。また、幅六間の道路が十間に拡張され、各所に新堀が開かれたりもした。そのために、武家屋敷地の移転さえもあつた。

そのとき、台地斜面にも数多くの火除地が設けられている。とくに、本郷台地の斜面は、大ざっぱにいうと、大名・旗本屋敷地（台地上）と下町（台地下）との間にあり、おおむね火事は下町から山の手へと延焼していくものなので、火除地としての確保が大事であった。

こうした火災防止の対策は、それなりの効果をそうした。次に天和の火災のときには、六日間におよぶ空前絶後の樁事にもかかわらず、明暦の火事ほどの死者をださなかつたのである。

さらに幕府は、火除地を新設した。たとえば、享保年間（一七一六〜一七三六年）には采女ヶ原、浅草内外河岸通り、神田堀通り小伝馬町、上町、塩町、日本橋坂本町、南北八丁通り、西神田鎌倉町、佐久間町、浅草蔵前通り、芝、四谷、市ヶ谷、麴町、牛込に火除地が設けられている。これらの地は、すべて町人居住地の下町であり、当時の市街地の過密と拡大現象を示している。そして、そうした火除地のほとんどは、川や堀沿いにあることにあらためて注目したい。

ここで、山際と水際に空き地（火除地）が連鎖状にあることの共通

の理由がたどれたことになる。

そして、火除地としての空き地をみると、その多くが寺社の門前にある。つまり、山際や水際が聖なる領域として、あらためて認められるのである。

そうしてみると、この場合は、東叡山寛永寺の門前にある上野広小路に注目しなくてはならない。

たとえば、幕府請方記録『御府内往還其外沿革図書』によると、上野広小路は、元禄十(一六九七)年の寛永寺大火(別の記録には元禄十一年ともある)があったため、上野北大門町と元黒門町の西側の町屋を撤去してつくった、とある。しかし、それはおそらく行政上の措置であって、実際は明暦の大火でそのあたりが焼けたあと、そのまま空き地となっていたのであろう。寛文二(一六六二)年の幕府の布達のなかには、「上野領広小路町」を町奉行支配にする、という記事がみえているのである。

しかし、さらに注目しなくてはならないのは、山下の火除地(資料①で斜線部分)



資料1 『東都下谷絵図』(嘉永4年=1851)より

の存在である。元禄十年の大火によって全焼した寛永寺の子院は山下町、現在の上野駅のあたりへ移転し、以来そこを境内に置いて「下寺」というようになった。その後、享保五、六（一七二〇、二一）年、続いて元文二（一七三七）年と短期間に三度も火災にあったため、下寺の両端に火除の空き地を設けたのである。その広小路に近い方の空き地は、東叡山の崖下にあたるため、「山下火除空き地」と呼ばれた。先の広小路は、幕府の措置であったが、この山下の火除地は、寛永寺の措置というものであった。しかし、どういふわけか寛永寺はそこを境内地にいれなかった。

つまり、この火除地は無領地となった（上野繁昌史編纂委員会編『上野繁昌史』による）。それが、のちに問題を生じることになる。

また、不忍池の土堤（資料①の黒塗りの部分）にも注目しなければならぬ。この築堤は、延享四（一七四七）年のことで、池の泥さらいのためであった、という。その土堤は、火除地ではなかったが、無領の空き地となった。

いずれにせよ、結果的に、そうした山際・水際の寺社周辺に空き地がある。その空き地に、しばしば集客を仕掛ける仮設の高市や催事が開かれることになった。もとより、そこは寺社詣での善男善女が集まる場所である。したがって、それは、祭日や縁日の外郭の装置として発達した例が多い。

たとえば、上野の場合、広小路や山下の空き地には見世物小屋や水茶屋がたち並び、多くの人びとでにぎわった。その様子は、たとえば

『遊歴雜記』に詳しい。

東武上野山下の原に於て、文政五壬午の年八月のさし入より、夥しき広き場所をかたどり、一円板屋根に造作して、大阪表より、罷下りし大江宇兵衛とかやいへる細工人、縮緬の小切のみにて作りし鳥獸人形、その数都合十種、大きなるあり小ききあり、その国その土地の風景を模し、からくり仕懸を以て人形の自然に動きはたらく様、綺麗にして、晴雨とも日々栄当くと見物群集し、児輩老人は怪我もあらんなど巷談区々なり……

また、『飛鳥川』には、次のように記されている。

此山下の賑ひ、中昔よりは迄をおもふに、乞食舞台の松川鶴市が歌舞伎のまなび、東藤六とうつり、鶴吉が手つまより文政の頃は祭文のあやつり座、舌講の里谷が大閤記、童の軽業、かたわらの床店、古道具さまざまの売物に名取茶屋のおもてはうしろむきて一たび大江宇兵衛が細工の笑い布袋、其後の塔の湧出、皆是長き日に歩行をとどむる処なりし

なお、そうした場所に季節によってはさらに人びとが集まって、同時に花を愛でたり、涼を求めたりすることにもなった。それを、江戸・東京という都市における物見遊山の典型とすることができるのではなからうか。

寺社界隈の空き地（火除地）に派生する商売（高市）といえは、右の二つの記事が示すように、まず見世物であった。

『大江戸志』にもいふ。

上野山下は元来幽閑の火除地なりしが何日の頃よりか両国広小路と等しく綱渡り、放下（見世物の一種）、繰り、踊、狂言等を専にして雑民市を成す寛政年中御停止になり、山下通の床見世のみ残る

ちなみに、右のからくりや軽業などのほか当時の見世物は、たとえば武技（居合抜き）・女相撲・曲馬（サーカス）・曲独楽・八人芸・影人形・手品・写し絵・細工（ビイドロ細工・菊細工・貝細工など）・猿廻しなどがあつた（高柳金芳『江戸の大道芸』・古河三樹『庶民芸能―江戸の見世物』による）。

しかし、それはあくまでも仮設の興行であつて、その意味では露店行商と同等のものであつた。

人だかりがあれば露店がでる。露店がでると人だかりができる。それは、現在の夜市や縁日の高市が示すとおりである。当時から寺社の門前に、たとえば各地を流れ歩く香具師の類が集まってきて露店を開いたであろうことは、想像に難くない。そこにはいわゆる大店筋の出店はなかつた。

露店の商売と大店の違いは、商業原則をあからさまにだすかどうか、ということにある。できるだけ安く仕入れて高く売るといふ姿勢が、とくに露店の場合、あからさまにみえるのである。

彼らの扱う商品は、不良品まがいのものが多い。それだけに、ただ商品を並べるだけでは売れない。そこで、口上や音曲を付加価値として売りさばくのである。何らかのかたちで、人寄せの芸が要る。客と

しても、口上が立て板に水を流すごとくおもしろおかしく演じられれば、落語を聞く木戸銭ぐらいのつもりで、だまされて割れている茶碗でも買ってみようか、ということになるのである。

見事な口上で商品の数や質をごまかすことが、かつての香具師の商売のスタイルであつた。たとえば、茶碗屋の場合など、昔は二〇個売ろうとすると三つぐらいはさしくって、一七個売るのが腕だった、という。もちろん、それは少しでも儲けようというさもしさが働いてのことではあるが、それとは別に、彼らのうちに商売を遊んで楽しむ気持ちがかんり潜在していたのではなからうか。客にちょっとしたパズルをいどむような、そんないたずら心がうかがえるのだ。ちょうど、落語の「時そば」のようなものである。また、それを受けとめられるだけ、客側もおおらかだったということにもなる。そうした口上売りは、昭和二十年代までさかんにみられた（そのことについては、拙著『わんちや利兵衛の旅』で詳しく述べている）。

高市も、物見遊山の客を集めるひとつの要素となつていた。買物とか芝居見物ほどに明確な目的意識をもたずに人が集まる、ちょうどのちのウインドゥッシュョッピングにも相当する作用があつた。

ところで、江戸中期には、仮設の露店や興行の統制のために、江戸を中心に香具師を集めてテキヤ組織がつくられていった事実がある。露店商人や大道芸人の大半は、零細な規模の旅稼ぎである。旅にできれば、土地の人との折衝もあり、同業者との軋轢もある。その調整のために、まず露店商人や大道芸人同士の統制が必要となつた。そうした

ところで、各地方ごとにテキヤ組織が生まれたのである。そして、いわゆる一家ごとの縄張りとか渡世や商法の仁義といったものが定められていくのであるが、それも山際や水際の寺社まわりの空き地が商業地として価値が高まっていき、ある規制が必要になってきたことを物語っている。お上の取締りとは裏腹な、自然発生的な同業者間の組織化が進んでいった、とみるべきなのである。

その香具師・テキヤの管轄する業種のなかに見世物の興行がある。それをテキヤ社会の言葉で「大じめ」といった。

見世物小屋がたつ盛り場は、さらに人を吸引する。あえて目的をもたずとも、人間には一方で他人に連れられてゾロゾロとくりだしていく群集行動があり、そこに猥雑性や飲楽性が生じるのである。それは、そこに華やかさがあるからである。日常と隔たったある種の興奮や陶酔を喚起する「場」、あるいは「装置」があるから人びとが集まるのである。つまり、それが、盛り場のひとつの原点になるはずである。

三 茶屋の興亡と既得権

——幕末の盛り場の発達

さて、次に、空き地（火除地）に仮設店舗での営業が生じるのは、飲食店である。つまり、お茶屋ができる。このお茶屋は、俗にいう水茶屋にはじまる。いまの喫茶店に相当するだろう茶屋である。別名、床几茶屋ともいう。

たとえば、江戸中期の作とみられる西村重長・鈴木春信画の『絵本江戸土産』の「志の葉津の池」（資料②）をみると、不忍池の中島弁天のまわりに、いかにもそれらしき茶屋ができている。中島のそれは、もはや仮設とはいいがたいが、湖畔のそれは、まさに空き地を利用した仮設の茶屋であることが一目瞭然である。

また、安藤広重画の『新撰江戸名所』の「不忍池新玉堤春之景」をみると、泥さらいのために築かれた土手（資料①の黒塗りの部分）の上に茶屋ができていく様子がうかがえる（資料③）。

そして、山下火除空き地（資料①の斜線部分）にも水茶屋が軒を連ねることになった。もっとも、それは、ひとつ上野広小路界限にかぎらず、江戸市中における盛り場の形成の象徴的なパターンというものであった。

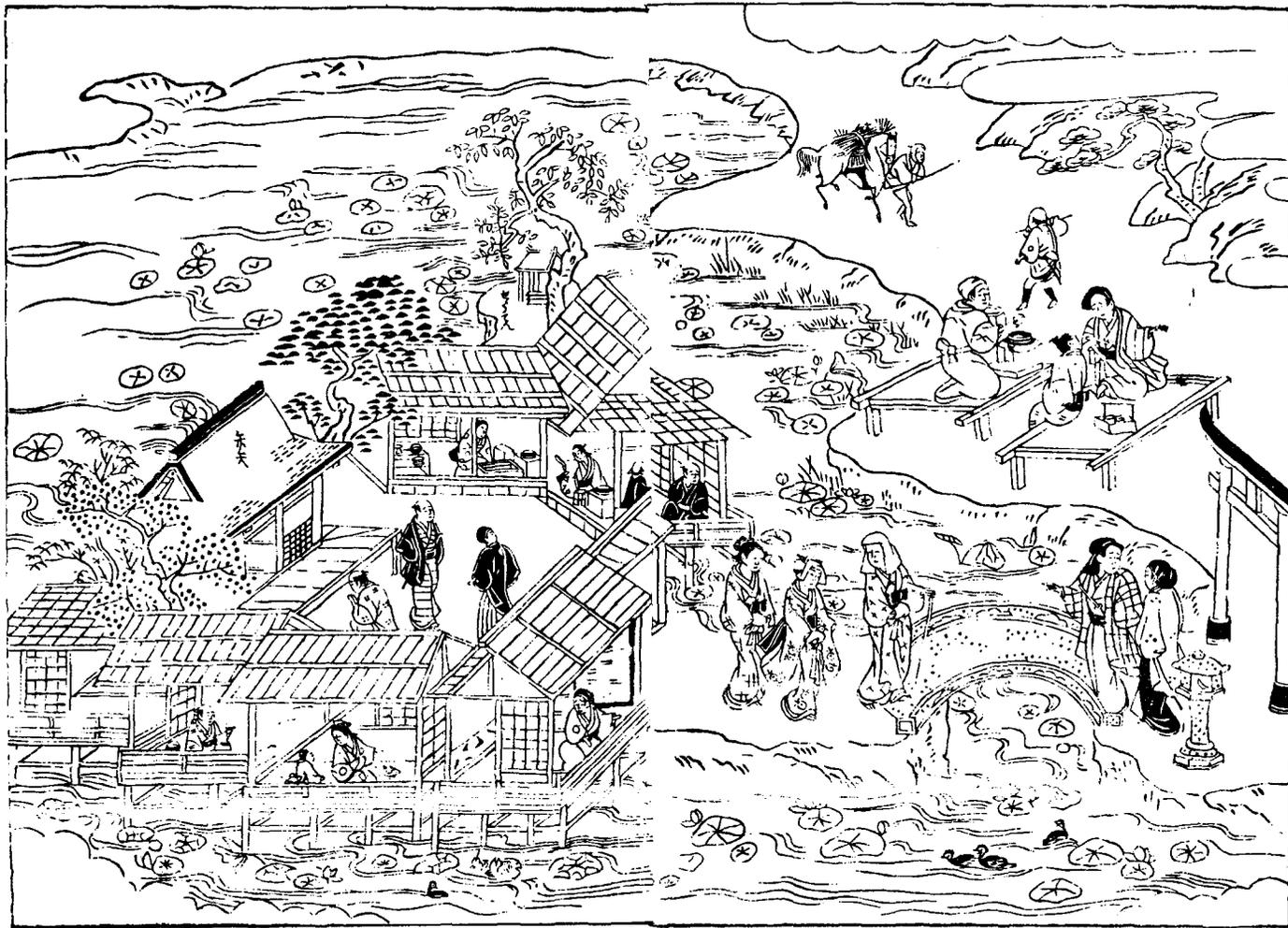
『世事見聞録』にいう。

水茶屋といへるもの、町々所に出来て、是又結構の造作をなし、腰をかけて茶を給^たべる事ばかりの客は下品の客にて、都て少女美婦に給仕を致させて酒宴の宿をするなり

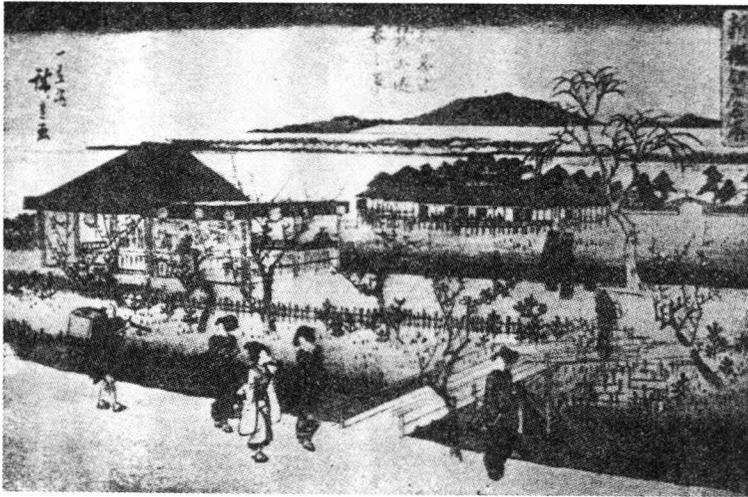
ところが、この給仕の少女美婦（資料④）が風俗上の問題となってくるのである。

『続飛鳥川』にいう。

一軒に兩人位ずつ、見世を張り、前だれ姿にて、大かたは眉も有、年増もあり、いずれも美婦計りなり、白昼に見世を張り、入口より三尺計り奥にいる故拵へものはなし



資料2 「志の葉津の池」——『絵本江戸土産』より



資料3 池畔の土手にできた出合茶屋
(広重画「不忍池新玉堤春の景」——『新撰江戸名所』より)

さらに、『山下新談』に詳しい。

見世は二間間口、或は九尺もありて、表は格子戸にて遊君見世に並び、前に小さき屏風をたて、紅粉を粧ひ、其美しき事春章竜湖斎が筆にも及び難かるべし(中略)二階は三畳、四畳程にしきり、襖戸にて建切り、四間五間あり、多くは商人の家へ裏から行



資料4 「水茶屋の女」——『百人女郎品定』より

抜きをこしらへ、或は壁と見せかけた戸襖などにて開き付たるものあり、或は水茶屋、料理茶屋の内より行抜をするようにしたるもあり

つまり、茶屋の裏や二階に小部屋をつくり、そこに少女美婦が客を引いたのである。当然、卑猥な売色行為が行なわれた、とみるべきで、『宝曆現来集』にも次のような記事がある。

何れも娘風俗にして十五、六より二十二、三を限りて如何にも

やさがたにして二百文の切売繁昌し

もちろん、これもひとつ上野広小路界隈にかぎったことではなかった。が、とくに上野広小路でのそれは、ひととき淫靡で股賑をきわめたようである。

ちなみに、『花知留作金』には次のように紹介されている。

山下稽古路、四方に左の如くあるとかや、各二百文より客をまねくや

- 一、広小路より左側入る所、本阿弥横町……………十二軒
- 一、本阿弥より西入る所、御数寄屋町……………八軒
- 一、大門町広小路の南、向折廻有車坂代地……………十一軒
- 一、井上横町（御成り小路東之方片側町、材木屋之並角口辻番所有）……………六軒
- 一、広小路大門町東側、松坂屋の並……………十九軒
- 一、御徒町入り口、取って返しも云北側……………十九軒
- 一、仏店（下谷啓雲寺之脇也）浜田屋と云料理茶屋之側細き小路折廻……………十五軒
- 一、山下側へ出口（角蔦屋と云水茶屋有る之通り）共に四方折廻……………十五軒
- 一、肴店、五条天神裏通東側……………六軒

右九カ所、都合百七軒有るなり

なお、ここにある「稽古路」は、けころのことである。とくに、山下火除空き地での茶屋の女たちを「山下のけころ」（けころは、蹴転

とか転寝と書き、幕府公認の遊廓での大夫に対して岡場所の娼妓をいっただもの）、「山下の前だれ」（前掲の『続飛鳥川』に表されているように、その前だれ姿からいったもの）といった。彼女たちは、吉原の遊女とともに、当時の江戸の色里を代表する女たちだったのである。さて、そうした茶屋には、町人だけではなく、武士たちも出入りすることになる。その様子は、『我衣』に描かれている。

下谷広小路の水茶屋へは、文化五年、御触有て、見世のかかり大造に致べからず、女を差置共、十三以下、四十以上と、美服等着すべからずとぞ、其当座は相守よふにもみへしが、年月のたつに随ひ、又々おごり過し、茶汲女多く絹布を着し、或は黒縞子の帯などにて、其美麗大そふ也。十三文か十六銅の茶代を置ては見向きもせず。只田舎武士或は山の僧など、彼らが口車に乗せられ、酒宴三味線にうたはれて、深夜まで遊びたはむれ、其外よからぬ事のみ多し、一体此水茶屋にて召抱ゆる娘も、一カ年一兩二分か、二兩の給金なれば、さのみ美服は着すること不叶、皆彼の武家出家などをたぶらかして着する也

幕府は、それを風紀を乱すものとして、ことあるたびに禁じてきた。近來諸大名留守居共、所々茶屋等にて出会、猥成遊興仕由風聞候、向後茶屋等にて之出会いハ相止させ可被申候、主人座敷長屋等にて出会候様ニ在之可然候（後略）（寛保三〇一七四三年）

おもしろいのは宝曆四（一七五四）年の一件で、その夏は不忍池の鯉鮒が死んで浮く事件が相つき、それが寛永寺の門主の耳に届き、そ

三 茶屋の興亡と既得権

れがため寺社奉行の命をもって水茶屋が取払われた、という記録もある（『三田村鳶魚 江戸生活事典』に所収）。ともあれ、幕府は相前後して、けころに代表される私娼と、それを抱える茶屋の営業をも禁じた。もとより、火除地での茶屋は不法の建物であり営業なのである。

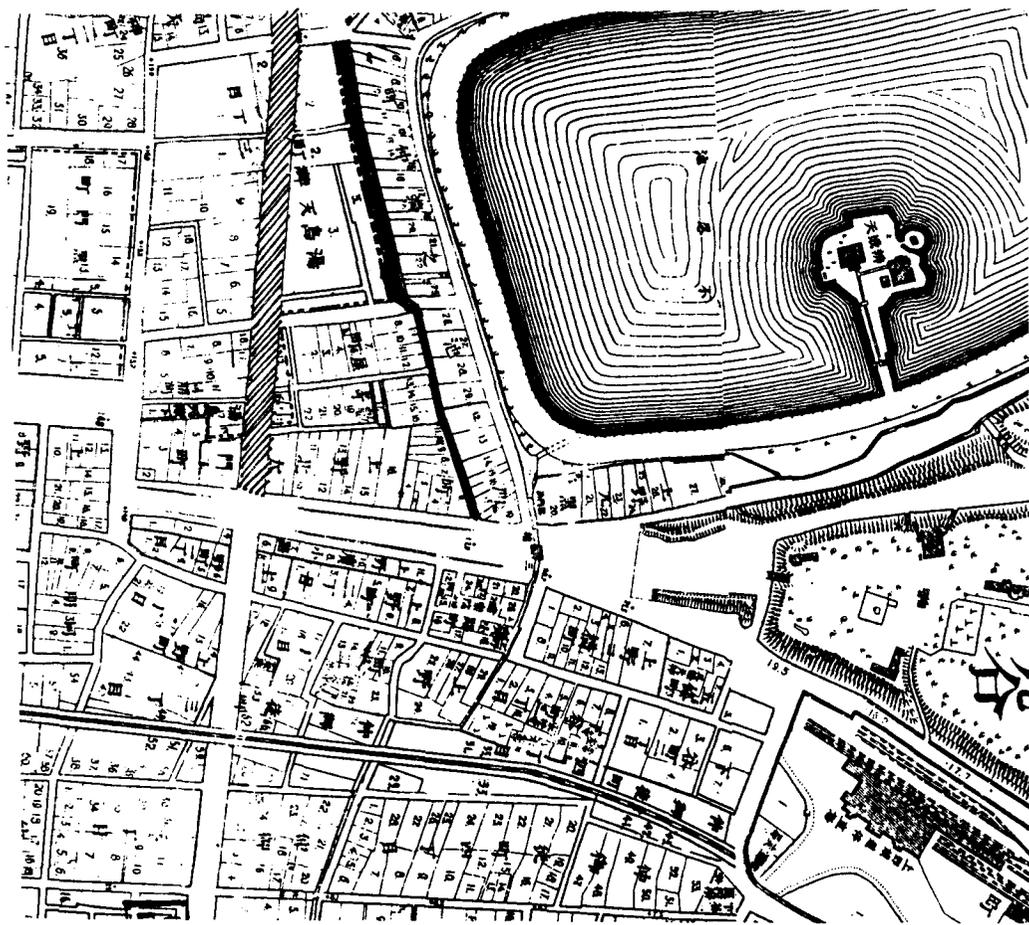
町々にて娘又は女を抱置、料理茶屋其外茶見世等ニ客有之候節差遣、売女同前之縁為致候由相聞、不届之至ニ付、若左様之者於有之は召捕、当人は不及申、町役人共迄咎申付（後略）

（文政四〇一八二二年）

もっとも、そうした享乐的な遊戯の類は、ひとたび流行の兆しをみせたのちは、行政的な取締りによって壊滅することは稀である。それは、近年の売春防止法や風俗営業がとかくザル法といわれたりする例からも容易に連想できるであろう。

やがて、女子の座敷芸が茶屋の宴席に公然と加わってくるのである。そうすると、武士、町人が同じ場所で遊びに興じることにもなった。

ちなみに、常設の料理茶屋ができて宴会がみられるようになるのが、記録に残るところでは明和年間（一七六四〜七二年）のことである。洲崎の「枿屋」など二十数軒の開業届がだされたのが明和年間であった。



資料5 『東京実測全図』（明治28年=1895）より

もはや、幕府の「御定」をもっともときの流れを止めることはできなかった。そして、嘉永元（一八四八）年には、ついに次のような御触がでた。

町女芸者と唱親兄などの為無抛芸一ト通にて茶屋向へ被雇候儀者格別、女を抱置芸者為致候儀は勿論娘妹等にて候とも其家にて一人を限り可申

つまり、芸者を大勢抱える芸者置屋の営業は認められないものの、一家一人に限り、親兄弟のためにやむを得ずその稼業をする芸妓を置くことが公認されたのである。

こうして、しだいに仮設の建物が黙認されるようになり、料理茶屋、出会茶屋、芸者置屋が組み合わさって、山際や水際に建ち並ぶことになったのである。つまり、江戸後期にいたって花街（三業地ともいわれる）が形成された、ということができよう。その花街こそは、遊廓とともに、江戸（後期）、明治、大正、昭和（おもに戦前）を通じての歓楽的な盛り場であったのだ。

四 盛り場の公用と拡大

——明治以降の軍需景気

江戸期の上野広小路の界限での盛り場の中心は、これまで考察してきたように山下（東叡山麓）と池の端（不忍池畔）にあった。つまり、台地際と水際にあった。

そして、現在の盛り場の中心は、それより西の春日通りにある。先に、現在の盛り場の起点は「駅」である、とした。

が、その間に、もうひとつ明治期における市電（のちの都電）の開通をエポックメーカーキングとして掲げておかなくてはならない。じつは、それによって、江戸期の盛り場の中心がいちど移っているのである。

とくに、池の端仲町と春日通りのにぎわいの対比が象徴的である。池の端仲町については、先にもふれたが、繁華街であり歓楽街でもあった。明治初年のあり方は、『新撰東京名所図会』（明治四十一年）に詳しい。

池の端仲町は、舊来の町家にして、商家櫛比、日夜繁華、区内有数の市街なり、此の地湯島天神下同朋町、下谷教寄屋町に対し、上野元黒門町に連なり、商業盛賑、百貨辨ずべし。近年市区改正の道路、湯島切通坂下より上野広小路を経て厩橋に通過するや、
当町は其裏通りとなれり（後略）

本郷（文京区）から厩橋（台東区）にかけて、つまり山の手から下町にかけての直線道（春日通り）が台地際を切り通して開通したのは、明治九（一八七六）年のことであった。これは、いわゆる電車道であって、すぐに市電が通じた。そこで、盛り場への客の流れが変り、右の引用文のような表（春日通り）裏（仲町通り）の位置づけがなされるようになったのである（資料⑤の斜線部分と黒塗り部分）。

そのとき、仲町通りの陸組（当時の商店街の組合）で、仲町通りへの市電誘致を行なった、とか、反対に市電開通を反対した、とかの話

が伝えられてはいるが、直線道をつくるということで地勢をみると、仲町通りに市電が通じるということは無理なことであった。こうした巷談を聞くにつれ、明治初年の鉄道や電車の開通による地元民の混乱と商業の興亡を思わずにはおれない。実際に、それまでの街道交通の発展にもなつて栄えていた宿場が、たとえば、東海道における関（三重県）や山陽道における矢掛（岡山県）のように鉄道開通を回避したために、以降の地盤沈下を防ぎようもないままに今日まで至っている例は多い。池の端仲町通りも、結果においてはそうであった。

しかし、花街は、商店街の打撃ほどに深刻ではなかった。花街に通う客は、市電に乗らないのであり、人力車や自動車を利用する者が多いからである。そこで、池の端仲町通りは、花街としてのイメージがますます濃くなったのである。

もともと、市電が通じた春日通りの向う（池の端仲町通りの反対側）の天神下、同朋町あたりにも花街が発達することになった。つまり、春日通りをはさんで両側の裏通りが花街となったのである。

とくに、花街の発展は、明治二十七（一八九四）年の日清戦争、明治三十七（一九〇四）年の日露戦争が契機となっている。むろん、客層の半分は政治家や経済人であることも明らかだが、軍用を無視しては花街の発展は考えられないのである。『上野繁昌史』にもいう。

また日清戦争も、日本の大勝利で幕を閉じた二十八年、神田講武所花街に軍楽隊を真似て、半玉だけのブラスバンドが組織され、大繁昌と聞いた松源主人は、すぐに数寄屋町と同朋町見番に

檄をとばして半玉を召集し、座敷を稽古場に洋楽を仕込み、主人源七の源を美奈茂都と読み更えて、楽団の名称としたがそのメンバーは次ぎの人々であった（後略）

さらに、うがってみると、第二次大戦後（昭和二十年以後）、昭和三十年代から四十年代にかけてしだいに花街が衰退していったのも、一方にバー・キャバレー・クラブなどでの手軽な遊びが流行したこともあるが、明治以降続いた軍需が完全にとだえたから、といえなくもない。

そして、花街は、ネオン街に姿をかえていった。が、はじめに示したように、現在の上野広小路の界限をみても、明治期の市電開通後に形成された花街の構造をうかがわせるにまだ十分なのである。

主要参考文献

- ・見聞記
 - 武陽隠士『世事見聞録』（七卷八冊） 文化一三年（一八一六） 八普及版／本庄栄次郎校訂『世事見聞録』改造社（改造文庫）一九三〇 本庄栄次郎校訂・滝川政治郎解説『世事見聞録』青蛙社 一九六六
 - ・洒落本
 - 樗々羅山人『山下新談』 安永六年（一七七七）
 - ・地誌
 - 大浄（敬順）『遊歴雜記』（五編一五卷一五冊） 文化一一年（一八一四）
- 序 八普及版／江戸叢書刊行会編『江戸叢書』に所収 名著刊行会 一九六四（一九一六〜一七七年刊行の複製）
- ・随筆

- 加藤玄悦(曳尾庵)『我衣』 宝暦二(文政八年(一七五二)一八二五)
 〆普及版〱岩本佐七・岩本蛙磨編『燕石十種一』に所収 図書刊行会
 一九〇七〽〇八 岩本活躍東子編『燕石十種一』に所収 中央公論社
 一九七九
- 小川頭道『塵塚談』(二巻一冊) 文化十一年(一八一四) 〆普及版〱
 岩本佐七・岩本蛙磨編『燕石十種一』に所収 図書刊行会 一九〇七〽
 〇八 岩本活東子編『燕石十種一』に所収 中央公論社 一九七九 柴
 村盛方『飛鳥川』 文化七年(一八一〇)
 作者不明『統飛鳥川』 〆普及版〱国書刊行会編『新燕石十種一』に所収
 一九一二〽一三 関根正直他監修『日本随筆大成 二期一〇』に所収
 吉川弘文館 一九七四
- ・図絵
- 西村重長・鈴木春信『絵本江戸土産』 安永八年(一七七九) 〆普及
 版〱佐藤要人解説『絵本江戸土産』(安永八年版の複製) 一九七五
 高柳真三・石井良助編『御触書集成』(全五冊) 岩波書店 一九三四〽
 四一
- 上野繁昌史編纂委員会編『上野繁昌史』 上野観光連盟 一九六三
 高柳金芳『江戸の大道芸』 柏書房 一九八二
 古河三樹『庶民芸能―江戸の見世物』 雄山閣 一九八二
 神崎宣武『盛り場は世界』―『へるめす』No.13 岩波書店 一九八七
 神崎宣武『盛り場のフォークロア』 河出書房新社 一九八七

(神崎研究室)

Changes with Sakari-ba (amusement quarters)

KANZAKI Noritake

Sakari-ba is one of the festive spaces in a city. It is a well-known fact that Sakari-ba is an area where drinking, singing, dancing and other entertainments all of which were considered unusual elements of daily life are accepted to take place on a daily basis. Those elements are also activities based on natural instincts that human beings share universally.

In Japan, it is not too long a time ago that Sakari-ba became a public place, open everyday for everyone to visit. Development of most Japanese cities did not take place until late except Kyoto, which has had some form of Sakari-ba. It is, however, difficult to determine whether the ancient Sakari-ba in Kyoto has anything to do with the present Sakari-bas. The prototype of Sakari-ba as a gay and entertainment quarters must be sought for in Edo Period.

The prototype Sakari-ba originated in Takamachi. Takamachi was an open market, which is sometimes observed now at festivals and fairs, and was often set up around or in the precincts of temples and shrines. Since most of the temples and shrines were built either at the foot of mountains or near the water, they also served as grounds for emergency escape from fires. Takamachi was first held in these grounds on an occasional basis and later became permanently open.

The government often ordered Takamachi to be removed as they were held in the emergency grounds and were believed to be conducive to the corruption of public morals. Toward the middle years of Edo Period, however, as there were no more wars and relative peace was maintained in the metropolis, Sakari-bas became more and more active as people's desires to seek for entertaining events were difficult to oppress. As a result, Yukaku (licensed quarters) and Kagai (gay quarters) developed.

They further developed during Meiji Period and at the beginning of the Showa Period as they were supported by the armies and soldiers. When the second world war was over, and there was no more support expected from them, Sakari-bas were again put into confusion.